

08-9

川崎病回復期以後にプレドニゾロン投与量に関連し眼症状が消退・増悪した一例

秋田赤十字病院 卒後研修センター¹⁾、

秋田赤十字病院 小児科²⁾

○杉村 祐介¹⁾、田村 真通²⁾、馬場 奈穂子¹⁾、
太田 翔三²⁾、木村 滋²⁾

【はじめに】今回我々は川崎病γグロブリン大量療法に不応で、プレドニゾロン(以下PSL)導入後に回復期となるも、PSL減量に伴い一旦改善した発熱・炎症所見・眼症状が再燃した症例を経験したので報告する。

【症例】症例は4歳11か月男児、2日前からの発熱、右頸部リンパ節腫脹を主訴に来院した。体温38.9℃、脈拍145回/分、血圧118/70mmHg。眼球結膜充血、口唇・口腔所見、不定形発疹、四肢末端変化、BCG接種部位の発赤腫脹のいずれにも有意の所見を認めなかった。頸部リンパ節は径4cm程に腫脹し圧痛を伴った。検査所見ではCRP10.44mg/dl、白血球25,200/ μ lであった。入院後抗生剤(セファゾリン50mg/kg)を投与した。第5病日に主要症状6項目が出現し川崎病と診断した。同日γグロブリン2g/kgを投与したが効果なく、第7病日に同量追加投与した。発熱が続くため第11病日からウリナスタチンを投与するも効果なく、第13病日にPSL2.0 mg/kg投与を開始した処、解熱・炎症所見陰性化、手指の膜様脱落を得た。第18病日にPSL1.0 mg/kgに減量したが翌日から発熱・炎症所見・眼症状の再燃を認め、PSL2.0 mg/kgへの増量で改善した。第24病日の眼科診察でぶどう膜炎所見は認めず、以後外来経過観察中である。

【まとめ】川崎病は原因不明の全身性血管炎であり、ぶどう膜炎を合併する事もある。通常重症化しないとされるが、稀に他の主要症状消失後も遷延し増悪する症例も報告されている。本症例はぶどう膜炎の診断は得られていないが、発熱・炎症所見と眼球結膜充血がPSL投与量に関連して消退・増悪を示した。川崎病の病態を考える上で興味深い症例と思われた。

08-11

AI剤にて治療中に急速に増悪した乳癌肝転移に対してMPAが有効であった1例

小川赤十字病院 外科¹⁾、小川赤十字病院臨床検査科²⁾

○長岡 弘¹⁾、高橋 泰¹⁾、杉谷 一宏¹⁾、中神 克尚¹⁾、
金 准之¹⁾、吉田 裕¹⁾、高橋 威洋¹⁾、大木 宇希¹⁾、
山本 梓¹⁾、釜津田 雅樹²⁾、前川 傑²⁾

【症例】61才、女性

【主訴】眼球結膜の黄染、全身倦怠

【現病歴】平成8年9月に他院にて右乳癌(T2、N0、M0:StIIA)の診断にてBt+Axを施行し、術後補助療法としてタモキシフェン20mg/日を2年間投与。平成19年3月高血圧で受診中の当院内科で行ったCT検査で肺、肝腫瘍を指摘され、当科紹介。初診時、右胸壁の手術創に近接した皮下に1.5cm大の硬結を認め、針生検を施行、病理検査にてIDC、Sci、ER(+)、PgR(+)、Her2/neu score0と診断。胸腹CT検査で肺、肝に多発転移、また骨シンチで骨転移を認めた。化学療法としてFEC60を4週毎に10クール施行、PRと評価、平成19年12月よりレトロゾール+ゾレドロン酸の併用にて経過を観察していた。平成21年7月15日に易疲労感を訴え受診、眼球結膜の黄染を認め、血液検査にてT-Bilが5.1mg/dlと上昇を認めた。腹部CT検査にて肝臓全体の腫大とびまん性の濃染像を認め、肝転移の増悪を疑い入院精査となった。入院後行った肝針生検では、肝細胞索に広汎な低分化腺癌を認め、免疫染色にてER(3+)、PgR(-)、Her2/neu(-)、CK7(+)、CK20(-)で乳癌の肝転移と診断した。

【治療と経過】肝庇護剤と安静にて経過をみたが、黄疸は徐々に増悪した。化学療法も考慮したが、PSの低下があること、また肝針生検で腫瘍細胞のホルモン感受性が確認できたため、8月10日よりmedroxyprogesterone acetate (MPA) 1200mg/日を開始した。治療開始後4週間目より黄疸は徐々に改善し、10週間後には3.0mg/dlまで低下した。経過観察中にCEAの減少も認めた。24週間より体重の増加とmoon faceを認めたため、MPA 600mg/dayに減量したが黄疸の増悪は認めず、9月30日退院し現在も状態の著変なく外来治療を継続している。

08-10

当院小児科における新型インフルエンザ(H1N1-A型)入院患者についての検討

浜松赤十字病院 小児科

○小林 正人¹⁾、柴田 幸信²⁾

【目的】2009年春から世界的に流行した新型インフルエンザ(H1N1-A型インフルエンザ:以下新型flu)は、従来のA型季節性インフルエンザ(以下季節性flu)に比べ、臨床症状や経過、治療に明らかな違いがみられたとの報告がある。当院小児科における新型fluの入院患者について検討し、季節性fluとの差異を考察した。

【対象】2009年10月から2010年2月に当院小児科に入院となったA型インフルエンザの患者51名を対象とした。PCR未施行例も含めて、全国的な流行状況や保健所の報告より、これらはすべて新型fluと考えられた。

【方法】これらの患者と、2007年度と2008年度の当科における季節性fluの入院患者を比較検討した。

【結果】入院患者の男女比は1.2:1で、平均年齢は7.8歳(男子8.1歳、女子7.1歳)であった。入院の主要因は、肺炎29名、異常行動7名、けいれん4名、脱水4名、喘息発作合併2名、希望入院2名、その他3名であった。肺炎で入院した29名のうち、発熱してから2日以内に酸素投与が必要となった患者が18名あった。急激に呼吸障害を呈する肺炎に対して、ステロイド投与が有効であった。

【考察】当科に入院した新型flu患者は、季節性flu患者に比べ、1.年長者の割合が多かった。2.発熱して間もなく肺炎像を呈し、呼吸障害を起こす比率が高かった。これらの特徴の要因について、文献的考察を加え報告する。

08-12

DCISに合併した悪性葉状腫瘍が肺に転移した1例

日本赤十字社長崎原爆病院 外科¹⁾、

日本赤十字社長崎原爆病院 病理²⁾

○谷口 英樹¹⁾、佐野 功¹⁾、進藤 久和¹⁾、
佐藤 綾子¹⁾、田中 研次¹⁾、濱崎 景子¹⁾、
中崎 隆行¹⁾、重松 和人²⁾

【はじめに】乳腺悪性葉状腫瘍は比較のまれな疾患であるが、血行性に転移する事が知られている。今回演者らは、非浸潤性乳管癌(以下DCIS)に合併した乳腺悪性葉状腫瘍が肺に転移し、胸腔鏡下に切除を行った非常にまれな1例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

【症例】症例は35才女性。主訴は左肺結節影。家族歴で母に肺癌。既往歴に肺癌手術、左DCIS(線維腺腫合併)手術がある重複癌症例であった。平成21年5月、右乳房のDCISと悪性葉状腫瘍を合併し、乳房部分切除+センチネルリンパ節生検を行い、術後放射線治療を行った。外来通院中であつたが、職場検診の胸部X線写真で左上肺野に結節影を認め、精査後手術目的で当科紹介入院となった。入院後全身麻酔下に胸腔鏡下肺部分切除を行い、病理組織学的診断は悪性葉状腫瘍の肺転移であった。経過良好で退院し、現在再発の兆候なく通院中である。

【考察】悪性葉状腫瘍は血行性に肺、骨などに転移することが知られている。しかし本症例のようにDCISを合併した症例の報告はない。悪性葉状腫瘍に対する有効な化学療法は確立されておらず、転移が単発であれば積極的切除が有用であろう。今後も厳重なfollow upが必要と考えている。

1月1日(木)
一般口演